

?と!が生まれる 自然環境

絵本のお話を園外の森につなげ、虚構の世界を楽しんでみましょう。普通の森が、子どものイマジネーションにより異世界に変わります。

監修＝大澤 力(東京家政大学教授)

自然を取り込む園庭作り vol.7

園外の自然を虚構の世界に

執筆＝内野彰裕(東京都・東京ゆりかご幼稚園園長)

園外保育で森に出かけるときは、さまざまな「中心的ねらい」を設定します。そのなかの1つが、4歳児クラスがよく行う、「園で読み親しんでいる絵本の世界を、実際に森の中で体験する」活動です。

保育者が読んでいた「ともだちや」シリーズ(偕成社刊)の絵本から、森への招待状が出てきます。差出人は絵本の主人公!早速準備を整えて子どもたちと森へ向かうことに。大きく深い森は、子どもたちを寄せ付けられないほどの存在感。保育者は森の入り口で、みんなが無事に森の中で過ごせるよう、「おまじない」をかけます。これは、日常の世界から、森という非日常の世界に入ることを意識させる意味もあります。子どもたちは気持ちを高揚させながら、絵本の主人公が住む森へと深く入っていきます。

そして、主人公である動物たちを大声で呼んだり、足

跡を探したりしながら進みます。事前に、切り株の上に動物たちからの手紙や、木の实のごちそうなどの「しかけ」をして、お話の世界が広がっていくように演出します。

歩きながら、自然物を拾ったり、香りをかいだり、森の音(葉っぱのこすれる音、木のきしむ音、鳥のさえずりなど)を聞いたり、森を十分に味わって、最後には主人公から自然物のプレゼントやお礼の言葉がつづられた手紙を発見!子どもたちの心が満たされたところで、森を後にします。また、森で拾った自然物は製作あそびに使うなど、その後の活動につなげていくことも大切にしています。

「自然とのふれあい」と「お話の世界」をつなげた活動は、大きな森だけでなく、身近な公園、林、田畑など、絵本の内容に合った場所で楽しむことができます。日ごろからなじみ深い園庭の自然では非日常感を味わいにくいので、園外の自然を利用することがポイントです。虚構と現実を行き来する幼児期だからこそ、さまざまな絵本や自然にふれ、心が豊かになることを期待しています。



絵本に挟まっていた手紙と、同じマークの付いた看板を発見!



発見したパズルに挑戦。完成したパズルの裏には、「葉っぱを1枚持って帰っていいよ」と書かれている。



切り株の上には、絵本の主人公が用意したごちそうが!



園に戻って、持ち帰った葉っぱで、しおりを作った。

※このページでは、「いつでも自然とふれあえる園庭」を目指して、保護者と子どもと保育者で園庭改造に乗り出した東京ゆりかご幼稚園の実践を、1年間ご紹介します。来月は「園外の自然で五感を鍛える」です。